

共振するコミュニティ農業とスローライフ



—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

この3月の中旬に「スロースクール夜間部」なる集まりに呼ばれた。東京の国分寺市にある「カフェ・スロー」というコミュニティ・カフェで「コミュニティ農業のこれから」をテーマに、食べるだけでなく育てるためのハーブや野菜をも販売する国立市の「herb & vege HOMETGROWN」の社長・伊藤進吾さんと対談するためである。

カフェ・スローは知る人ぞ知るスローフード運動の拠点でありメッカだそうであるが、ここを使って、夜7時半から月1回ぐらいのペースで開かれているのが「スロースクール夜間部」だ。文明の進展とともに人間は「便利さ」と

「豊かさ」を手に入れることによって、際限なく欲望を膨らませてきた。一方で、日々の暮らしから自然を切り離し、自然の復元作用さえも奪いかねない危機的状況を招きつつある。「この流れを変えていくには、私たち自身が暮らしの在り方を衣食住という日常から改めて問い直し、自然と共生する暮らしとはどのような生き方なのかを再構成することが何よりも大事」であるとして、「暮らしの原点を見つめ直しながら、地球に負荷をかけない生き方、考え方を学びあうことを通して、衣食住の在り方、創り方、関わり方を学び、実践していくための多様な学びの広場」としての役割を果たしていくことがスロースクール夜間部のねらいだ。

ここで筆者が強調したのが持論の「コミュニティ農業」である。コミュニティ農業とは筆者の造語で、人と人、人と自然の関係性を大事にしていく農業を指す。人と人、すなわち生産者と消費者の顔と顔の見える関係性、産消提携をベースにすると同時に、人と自然の関係性、すなわち環境にやさしく生物多様性を尊重した持続的循環型の農業をいう。そして狭い日本でのこれからの農業は規模拡大、生産性向上というよりは、都市農業を一つのモデルにすべきだ。すなわち都市農業振興基本法で打ち出された多様な機能、特に国土・環境の



熱気が漂うカフェ・スローでのスロースクール夜間部

保全、良好な景観の形成等の多面的機能に付加された、農業体験・学習、交流の場、都市住民の農業への理解の醸成の機能を発揮していくことがポイントとなる。この付加された機能は農業に付随して当然に発揮されるものではなく、生産者と消費者が一体となって主体的自立的に関わることによって発揮される機能であり、これを可能にしていくものがコミュニティ農業だ、という文脈でお話させていただいた。

対談の後に参加者とのやりとりが行われたが、改めて参加者が日本農業、都市農業に強い関心を持っていることに驚かされた。参加者は30人弱ではあったが、この会の告知はFacebookだけだそう、参加者のほとんどは初対面とか。そして多くが仕事の名刺に加えて、別途、個人で活動しているNPO等の名刺を持っているということで、二重三重に驚かされた。一部とはいえ食を通じて農業に関心を持つにとどまらず、農業への参画を地域活動の一環として捉えて行動しようとする市民が着実に増えていることを実感することができた。

久しぶりに会場を立ち去りがたい余韻に浸ることができ、居残った参加者と駅前の居酒屋で引き続いての議論・懇親に。とうとう最終電車で飛び乗って帰宅するという、うれしい夜であった。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など